

2018.10 のブログ：「孤独の発明 または言語の政治学」を読んで、の詳細
(→ <http://www.1968start.com/M/blog/index.html#1810>)

「孤独の発明 または言語の政治学」を読んで

■この本の読書のきっかけ

2018.9.1 の朝日朝刊にこの本の書評が掲載された。

(書評) 『孤独の発明 または言語の政治学』 三浦雅士〈著〉 (2018.6、550頁)

「状況を俯瞰する超越的な視点」という書評の以下の内容に興味を持った：

- ・孤独とは、言語によってもたらされた自分で自分に話しかける内的思考のこと
- ・言語の起源は、視覚を持つことで、状況を俯瞰する超越的な視点が生まれたこと
- ・視覚と言語には本質的な類似性がある

私は、院生時代(1969-1971)に「思考過程の数学的表現」の研究の一環として、内的思考と言語の関係に興味をもっていたことと、当時の知識として、眼球ないし視覚は前頭葉の発達したものと学んだ記憶があったことから、「目は口ほどに物を言う」と思いながら、本書を読んでみる気になった。

■読後感

- ・私とは言語に関する興味の観点が異なっていたが、再考するきっかけとはなった。
- ・本文の中に、古今東西の著作物や著者が頻繁に引用されるが、それらの予備知識を持たない(私のような)者には、その評論の是非は不明。

■断片的コメント

以下に、興味本位のコメントを述べる。

『・・・』の部分は、本文の引用。

→★の部分は、私のコメント

【はしがき】

『孤独とは、自分で自分に話しかけること』

『言語こそ、自分で自分に話しかけることをもたらしたもの』

→★ここでの言語は、思考言語ということになる。(コミュニケーション言語ではない)

『孤独は始めから方法的懐疑を内包している』

『自分を疑っているというそのことによって自分の実在を確認する』

→★デカルトの「われ思う、ゆえにわれあり」のことか。

『言語は相手の身になる能力、相手と入れ替わる能力を前提とする』
『・・・さらに上から俯瞰する第三の視点を想定しなければ成立しえない』

→★自己の対象化のことか。本文では「対象化」という表現がよく出てくる。

『私から私の個別性を拭い去ったいわば抽象的な第三の視点が我々なのだ』

→★大学1年生の時のカント哲学の授業で、大文字のIchと小文字のichについて先生が熱っぽく語っていたことを思い出したが、関係ありか。

(参考) 下記のWeb検索結果では似ている：

＜カントによれば、正しい「思想」・「事実」として存在する「自我」とは、
個性的な存在としての「自我」つまり「小文字の<私>(ich)」ではなく、
「理性一般」としての「大文字の<私>」すなわち「超越論的自我」である＞

【 1： 現地語・国語・普遍語】

『水村美苗の「日本語が亡びるときー英語の世紀の中で」の英訳』
『家族の中で言語を習得し（現地語）、社会に出て他者との関係の仕方を学び
（礼儀すなわち国語）、やがて文学や芸術（普遍語）に憧れるようになる』

→★私の場合：

話し言葉：出身地の方言 →上京して標準語 →就職して英会話
書き言葉：教科書、ラジオ、テレビの標準語 →研究論文（英語）

→★国際会議での論文とスピーチは英語が指定されているが、
国際英語（普遍語）と国内英語（現地語）は区別すべき。
米国生まれの参加者も国内英語ではなく、国際英語を使用すべき。
（英会話で苦労した者の愚痴・・・）

『中国に国語はない。ただ現地語と、漢字漢文という普遍語があるだけ』
『中国語は一言も喋れないのに、中国人以上に立派な詩を作れる人がある』

→★英語の論文を書いているのに、英会話がダメな人がいますよ。（^^;;

【 2： 観法の地平】

『小林秀雄の「無常という事」所収の「西行」』
『まどひきてさとりうべくもなかりつる心を知るは心なりけり』
『西行の歌は、自分が自分について考えている、つまり
自分は自己言及の悪循環に陥っているのだから、
悟りえないのは当たり前なことだ、と述べているのである』

→★この「心をしるは心なりけり」という「自己言及の悪循環」と類似のことを過去に経験している。

私の1971年の修士論文「思考過程の数学的表現と模擬実験」の終章で次のように記載：
「思考は、人間の所有物でありながら、それは所有権なき所有であって、
我々は、それを支配することはできない」
「思考についての研究が、その思考によって行われるというジレンマから逃れることができないとすれば、我々はすでに第1歩からつまづいていることになる」
(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

1970年の研究会での発表「思考過程のシミュレーション」では次のように記載：
「『考えることを考える』という一人二役的困難さのために、
一方の役を熱演しすぎると、他方がおろそかになる」
(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/gakkai7012.html>

1986年の勤務先の所内報に「考えている私を考えている私は誰?」という随筆を執筆
(参考) <http://www.1968start.com/H/8604WhoAmI>

『悟れなかったということから自ら悟るという論法は、「心自ら心を覚る」に通じ、
また「心自ら心を証す」に通ずる』

→★いわゆるソクラテスの「無知の知」との類似性やいかに。

『人は、自分の身になって世話してくれる母を見習うことによって
自分なるものを形成する・・・つまり他者として自己を見出す』
『相手の身になることができるようになるのとまったく同じ瞬間に、
人は、相手と自分の双方を眺め得る視点を獲得するようになる』
『つまり、世界を俯瞰する視点である』

→★私の修士論文において、考えている自分の思考過程を観察することで
思考過程の数学的表現を模索する研究手法も「俯瞰する視点」といえるかも。

『言語は相手の身になることができなければ成立しない』
『俯瞰したうえで相手の身に乗り移ることが瞬時にできなければ、会話、
いや関係そのものが成立しない。それこそ言語獲得の第一条件なのだ』

→★ここでの言語は、思考言語ではなく、コミュニケーション言語ということ？

【 3： 「言語の機能は自分を苦しめることだ」 】

『チョムスキーは、幼児が母語を獲得する過程を見れば、
それが後天的な能力によってなされているとはとても思えないとする』
『トマセロは幼児の言語取得と大型類人猿の認知能力の専門家である』

→★私が修論で重要視したヴィゴツキーに言及されていないのは残念。

『21世紀になってからのチョムスキーの発言で強い興味を引くのは、
言語はコミュニケーションの手段ではないという言明』
『言語仕様のほとんどはじつは心の中で起こっている』
『人はいつでも自分自身に語りかけている』

→★私が修論で重要視したヴィゴツキー「思考と言語」（1934年）は、
幼児期の言語能力の習得過程で現れる自己中心言語について、
一見、コミュニケーション言語の形式をとりながら、じつは、
内言すなわち思考言語を習得しているとしている。

（私の修論の第一章「思考の解析」の1.1節「心理学から学ぶこと」からの引用）

「彼は、言語的思考要素に分解して分析すべきではなく、要素の代わりに、単位を考えるべきであるとし、言葉の意味を言語的思考の単位として扱う。さらに、この言語の意味的側面の研究は深化されて、内言の研究に進んでいる。そして、・・・、内言では、逆方向の、外から内に進む過程、言語が思想へ気化する過程であるという。この内言の研究にあたり、彼は幼時の自己中心言語に注目し、最初に、この研究で実績のあるピアジェを再び批判し、自己中心言語は、内言の発達に先行する一連の段階であり、これは、ピアジェのいうように6歳ごろに消滅するのではなくて、内言へと移動し、成長、転化することを明らかにした。」

（参考）<http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

『いつか取り組まれるべき興味深い研究課題があるのですが、それは、
我々の内面的な発話は、いったん表出された発話を再度内面化したものの断片である
という可能性が非常に高いということ』（チョムスキーの発言）
『言語はコミュニケーションというよりは人間的思考の起源だと述べている』
『発話された言語を再び内部に取り込んで反芻するかたちで発生した人間的思考・・・
言語によって形成されていると思われる人間の内面的思考の全容はいまなお
まったく解明されていないというのである』

→★再びヴィゴツキーを引用したい：

（私の修論の第一章「思考の解析」の1.1節「心理学から学ぶこと」からの引用）

「このように、ヴィゴツキーは、内言を思考言語として独立させて、思考と言語の研究を成し遂げた後、さらに大きな問題、すなわち意識の問題にぶつかった。しかし、「思考と言語は、人間の意識の本性を理解する鍵である」という言葉だけを残して、若くして逝ってしまった。」

→★チョムスキーの「発話された言語を再び内部に取り込んで反芻するかたち」は私の修論での思考モデル（f g サイクルモデル）に類似する。

1970年の研究会での発表「思考過程のシミュレーション」では、次のように記載：
「思考言語に注目し、それを意識の面からとらえ、大脳におけるエネルギー分布の集中化作用とし、他方、集中したエネルギーの拡散化作用を連想機能として、

これら両作用の交互反復過程を思考過程と考えた。」

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/gakkai7012.html>

『無意識こそ言語 ーつまり発話を再度内面化したものー であり、しかもそれは構造化されていると述べたのはラカンであり、意識の多くは意識されていないと述べたのはチョムスキーである』

→★私の修論での思考モデル（f g サイクルモデル）では、思考エネルギーが集中と拡散を繰り返し、十分に集中した概念が外部に発話されるので前者を無意識状態、後者を意識状態と考えることができる。

『「ドイツ・イデオロギー」のこの個所から、・・・
言語を「他人にとっても私自身にとっても存在するところの実践的な現実的な意識」
・・・「私自身にとっても」と付け加えたのはエンゲルスである・・・』

→★エンゲルスについては、私の卒論「条件反射の生体工学的解析」（1969）の冒頭で、彼の著作「自然の弁証法」（1876、訳本：岩波文庫、1956）から以下の引用を掲載している：

「手と言語器官と脳の協同作業によって、各人にあつてのみならず、社会の中でも、人間はますます複雑になっていく諸作業を遂行し、いよいよ高い諸々の目標を自らに課し、かつそれを達成することができるようになった。
(1876 エンゲルス) 」

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/soturon.htm>

『ヘーゲル、マルクス、キルケゴールといった哲学者は、逆に、それこそが自己という現象だと考えたのである。
自問自答がコミュニケーションの、つまり言語の最大の役割だと考えている』

→★自問自答は思考言語（内言）ということになるが、
大学1年の時の文集に掲載したキルケゴールの死に至る病の感想文には、
このような深い考察はなかった。(^^;;

『言語を獲得して以後、人間には、動物、植物はもとより、世界の全体が意味に満ちたものとして現れるようになってしまったのである。』

→★同感。

【 4： 「うたげ」と「孤心」の射程】

【 5： 「まれびと」の光背】

【 6： 光のスイッチ】

『眼は心の窓とは言い古されたことだが、・・・』

『見るという行為の次に、見つめるという行為、すなわち凝視が続くことから、眼が精神の起源であることが納得される。見るから見つめるへの移行は、見るべき対象が、見えるものから見えないものへと移行したことを示す。見えないものとは、とりあえず、見られているその対象が何を考えているかの、その眼には見えない考えのことであるといっている。それを意図といっても、意志といってもいい。』

→★最初に述べた、本書への関心を再掲する：

眼球ないし視覚は前頭葉の発達したものと学んだ記憶があったことから、「目は口ほどに物を言う」と思いながら、本書を読んでみる気になった。

『私は私の中で起こっている思考を持続させようとしているが、それは私が思考しているということではない。ある思考が私の中で生起しているにすぎない。そう考えさせるのである。そしてその思考を私という場にもたらしめているのは、私という現象をはるかに遡る、眼の誕生であり、言葉の誕生であると思わせる。』

→★2章の「心をしるは心なりけり」という「自己言及の悪循環」へのコメントをここで再掲する。むしろ、ここでコメントしたほうが適切！

私の1971年の修士論文「思考過程の数学的表現と模擬実験」の終章で次のように記載：
『思考は、人間の所有物でありながら、それは所有権なき所有であって、我々は、それを支配することはできない』

『思考についての研究が、その思考によって行われるというジレンマから逃れることができないとすれば、我々はすでに第1歩からつまづいていることになる』

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/shuuron.htm>

1970年の研究会での発表「思考過程のシミュレーション」では次のように記載：

『『考えることを考える』という一人二役的困難さのために、一方の役を熱演しすぎると、他方がおろそかになる』

(参考) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/gakkai7012.html>

1986年の勤務先の所内報に「考えている私を考えている私は誰?」という随筆を執筆

(参考) <http://www.1968start.com/H/8604WhoAmI>

★この本によれば「考えている私と見ている私」という表現が適切？

「見ている私」は主体で、「考えている私」は対象ということになる？

『見るという行為がはじめから俯瞰する眼をともなっていたということ、つまり、見るものが完全に遂行されるためには、現に見ているというその行為をさらに見るが必要とされ、現に見ている以上、いわば「離見の見」（世阿弥）もまたともに実現されているのだということ、見るということにははじめから共同性の次元が付与されているのだということの意味している』

→★前項に同じ

離見の見（りけんのけん）とは：

世阿弥が能楽論書「花鏡」で述べた言葉。

演者が自らの身体を離れた客観的な視線をもち、

あらゆる方向から自身の演技を見る意識のこと。（能楽用語辞典から引用）

『日本人から見れば、西洋思想はひたすら「われ思う」をめぐる
無駄な努力をしてきただけではないかと思われるほどだ』

→★この意味はよくわからない。

「われ思う、ゆえにわれあり」に関して、

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う」と書き加えれば、

後の「われ思う」が俯瞰する眼、すなわち「われ見る」ということでいいのでは？
さらに、以下のような繰り返しも考えられる：

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う・・・」

【7：人は奴隷から生まれる】

『奴隷の思想を体現しながらも主体的であるかのように振る舞う唯一の方法は、
王侯に仕えながらもそれを越えた理念に仕えているように振る舞うことである』

『孔子のこのような流儀がやがて知識人の常套になっていく』

『言語を持つことによって、人間は自分を自分の奴隷にしたのである。

そうすることによって、他人の奴隷になることもできるようになった』

『自分を自分の奴隷にすることによってはじめて、

自分は自分の主人になることができる。それを主体的というのだ。』

→★興味深い視点ではあるが、たとえば「私は自分の理念をつらぬく」といったとき、
「私」は奴隷としての自分で、「自分」は主人としての自分、ということになるか。
すなわち、「奴隷は主人の理念をつらぬく」
あるいは、「奴隷としての自分は主人としての自分の理念をつらぬく」と解釈する。

『田村が明治大学に進んだのは小林秀雄が教えていたからであると私は確信している』

『田村隆一の詩で最も有名なフレーズは「言葉なんかおぼえるんじゃなかった」である。

詩集「言葉のない世界」の詩「帰途」の冒頭である。』

『 言葉なんかおぼえるんじゃなかった

言葉のない世界

意味が意味にならない世界に生きてたら

どんなによかったか 』

→★この詩集は1962年刊行とのこと。

私の1968年（大学3年）の時の文集掲載の創作「虚言に溺れる」の

冒頭の詩（「冬の詩」または「絶対零度」）がこの詩によく似ている！

私は冬が好きだ

寒気につつまれて

人はみな眠ったようだ
ヒューヒューと吹き抜ける
木枯らしだけを残して
神も眠ったようだ
悪魔も眠ったようだ
私の心は極限まで安らぐ
その価値を問わず
すべてが眠ってしまった世界
絶対零度
私は冬が好きだ

(詳細) <http://www.1968start.com/M/bio/olduniv/1967poemB.htm>

【 8： 土着と外来】

『井筒俊彦は「意識と本質」において・・・次のように述べている』
『深層体験を表層言語において表現するというこの悩みは、
表層言語を内的に変質させることによってしか解消されない。』
『言語がこの概念化作用の延長上に形成されていることは明らかである』
『世界の概念化の背後に感覚から知覚への移行を見てそこに止揚つまり
アウフヘーベンという働きを見出したのはヘーゲルである』
『俯瞰もまたヘーゲルふうにいえばアウフヘーベンのひとつなのだ。
そして言語はアウフヘーベンから生まれたのである』

→★「感覚から知覚への移行」とは「視覚→言語表現」のことかな。

【 9： 詐欺の形而上学】

『我々の世界は、変化消滅する現実相と、不変常住の永遠相からなっている』
『対立する二項は空として本来は同じものなのであり、
それこそが真実相ないし永遠相ということなのだ。』
『本覚思想はその空である永遠相をつきつめて、
そのはてにおいて二項対立の現実相に戻る。そうすることによって
二項対立のそれぞれを同じように肯定しようとするのである』

→★これと類似の概念を $\{A \neq \Omega \mid \alpha = \omega\}$ という表現で学生時代に使用していた。

$\{A \neq \Omega \mid \alpha = \omega\}$ とは？

建前はいろいろあるが、本音は一つである。

表面上は違って見えることも、中身は同じである。

物事には初めと終わりがあるように見えるが、実は何もない。

種々のパラダイムは異なるように見えるが、本質は同じである。

すべてのパラダイムは統一される、または、マルチパラダイム化される。

(参考) <http://www.1968start.com/M/takeshi/index-alphaomega.html>

【 10： 死の視線】

『1960年代は、実存主義がその流行の最盛期にあった』

→★同意。この著書には「1960年代」という表現がよく出てくるが、
実は私もこの著者と同じ年の生まれなので、よくわかる。(^^)

【 11： 商業と宗教】

【 12： 思考 赤ん坊は攻撃だ】

【 13： 感動の構造】

『言語は一般に考えられているように聴覚に基盤を置くわけではない。
視覚に基盤を置いているのだ。言語が構造として捉えられるところに
その事実が端的に示されている、と、数章にわたって述べた。』

→★話し言葉でたとえば「一本杉のところに鹿がいた」と話したとき、
一本杉の場所や鹿という獲物の存在は視覚的概念で、
かつ場所&獲物の存在という組合せの構造があるということかな。

【 14： 視覚革命と言語革命】

『自分は自分を欺いているのではないかという疑いは、外界の事物はじつは
自分を欺いているのではないかという疑いの、内面化である。この内面化は、
思考が言語によって外在化したこと – 自分で自分を見ること、見なすこと、
見なすように他者を強いること – によって訪れたのだとしか、私には考えられない』

→★ちょっとわかりにくいですが、外在化によって内面化した、という文章なので、
自分で自分を見る、見なす、見なすように他者を強いるようになった結果、
外界の事物は自分を欺いているのではないかと疑うことから発展して、
自分は自分を欺いているのではないかと疑うようになった、ということかな。

『思考の領域が行動の領域から自立することと、記憶の領域が自立することとは表裏である。
記憶は思考の素材であり、図式化されるべきものの筆頭である』

→★図式化がわかりにくい。

『言語の領域には正解などというものは存在しないのである。解釈は無限に続く』
『デカルトの疑いにしても同じことだ』

→★6章で述べたコメントの再掲：

以下のような繰り返しも考えられる：

「われ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う、ゆえにわれあり、とわれ思う・・・」

『反省とは自分を疑うことである。自分の思い違い、すなわち自己欺瞞を疑うことだ。人は自己欺瞞を疑うことによって脱皮していく。一般には、自問自答するこの次元が孤独であるとされる。自問自答にともなう寂しさや哀しさ、自身への憐れみが孤独の実質とされるのである』

→★この本のタイトル関連部分。

【 15： 飛翔する言葉—社交する人間の「うたげ」】

『いまや英語は普遍語とされるが、この普遍語は、それを国語としない人々の使用によって、現在ただいま刻一刻と変容しているというべきであろう』
『現地語としての英語と普遍語としての英語のあいだには決定的な違いがあると見なさざるをえないからである』

→★第1章でのコメントを再掲：

国際会議での論文とスピーチは英語が指定されているが、国際英語（普遍語）と国内英語（現地語）は区別すべき。米国生まれの参加者も国内英語ではなく、国際英語を使用すべき。（英会話で苦労した者の愚痴・・・）

【あしがき】

『生命からの逸脱が言語の仕業であるとすれば、それを解明する責任は言語の専門家である文学者にある。文学者の使命は声明を出したり署名活動をしたりすることではない。言語の仕業のその仕組みを解明することにある。それが言語の政治学だ。』

→★この本の副題との関連部分。

残念ながら、この本を読む動機となった私の「内的思考と言語の関係」に関する興味を満たす内容ではなかったが、再考するきっかけとはなった。

『書くということは、少なくとも私にとっては、自分が考えていることを見ることである』

→★同意。より深く考えるにはこの作業は欠かせない。

さらに、書いたものを残しておけば、あとから当時の自分に会える楽しみもある。
(^^)

以上